私たちのまち西脇市は、兵庫県のほぼ中央部、東経135度と北緯35度が交差する「日本列島の中心・日本のへそ」に位置しています。人口は約4万130人で、この20年間で人口は約14％減少し、高齢化率も32・84％にまで上昇しています。西脇市は中国山地の南東端にあり、低い山地に囲まれた平野部を3本の河川が貫流する自然豊かな地方都市です。古くから農業が盛んで緑のあふれる情景が広がり、また、商業施設、教育施設、医療機関などの都市機能が共存しており、誰もが安全で安心して暮らせるまちづくりを進めています。

私たちが暮らすまち西脇市比延地区は市内でも特に少子高齢化や人口減少が進んでおり、高齢化率は38％を超えています。約12年前、地域にあったスーパーマーケットが撤退することで住民が危機感を抱き、主に60歳代以上の地域の方々が中心となり、農協跡の店舗を利用し、小規模商業店舗の運営（日常品、惣菜等の販売）をスタートさせました。住民組織で行うことで、安心して利用でき、地域のコミュニティの中心になり、人の輪がさらに深まっています。住民組織で、みんなが集えるサロンの運営はよくある活動ですが、ええまち比也野里は、生活（生きること）に直結した、生活必需品の販売も行っています。季節感のある商品や、お客様一人ひとりの顔を思い浮かべながら仕入れができるのは、私たちだからこそできることだと取り組んでいます。

店舗の近くに住んでいる人は便利になりました。

まちむら発見①

地域で支える、ものと笑顔と夢を運ぶ移動販売車

兵庫県西脇市　ええまち比也野里（ひやのさと）

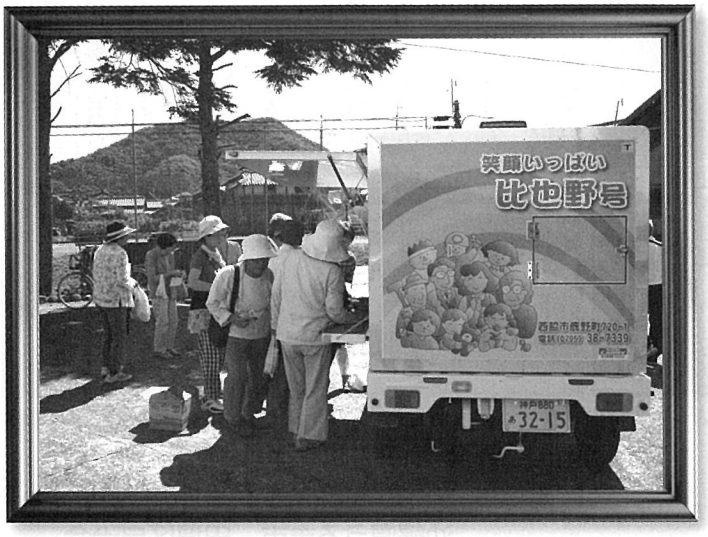
惣菜やお菓子、調味料など詰め込んだ移動販売車

しかし、比延地区の山間部の方々にはまったく届いていない状態がずっと続いていました。比延地区の北部は、高齢化率44％の地域です。当初は、いきいきサロンを活用し、月に1回集会所で販売をすることもありました。地域をまわる移動販売車があれば、みんなで見守りもかねて車で巡回でき、毎週様子も見にいける。そんな想いを抱きながら数年地道に活動を行っていました。それが現実になったのは平成26年9月、総務省の「過疎地域等自立活性化推進交付金」の補助メニュー「過疎集落等自立再生対策事業」の事業採択を受けることになったのです。夢の移動販売車「笑顔いっぱい比也野号」が誕生しました。名前は地元中学生が考え、車のイラストは地元中学校美術部の皆さんが描いてくれました。地域のみんなで作った移動販売車です。

スピーカーから流れる元気な歌声は地元のバンドが作った「この町」という曲です。すっかり比也野号の到着をお知らせするテーマソングになっていま

す。販売車が広場に到着すると、待っていた皆さんが集まってこられ、お買い物を楽しまれます。販売場所まで来ることも困難な方には、なるべく家の付近まで・・・そうしているうちに販売場所はどんどん増えていきました。それでも私たちのまちづくり団体が運営する意味をしっかりと信念として持ち、買い物支援だけでなく、コミュニケーションの場づくり、見守りもふくめて運営することだと考え取り組んでいます。当初、「笑顔いっぱい比也野号」は、週1回巡回していましたが、現在比延地区全町を週2回、コースを変えて巡回しており、休むことなく毎週運行することで、地域の買い物支援、見守り機能を担い、住民にとってなくてはならないものへと発展しています。自分で買う喜び、買い物をする楽しみ、「地域で運営するので安心」をみんなで守っていきたいと思っています。

　ええまち比也野里を支えている地域のボランティアさんは約100名。ボランティアさんの高齢化も進んでいます。



比也野号のイラストは地元中学校美術部の作品

それでも大切な家族が暮らすこのまちで、自分を育ててくれたこのまちで、支え合って暮らしています。「このまちに育ててもらったから、これからは地域に恩返し」ボランティアさんは口々にそう言われます。

　現在、大切な移動販売車を守っていくために、加工品の販売などコミュニティビジネスにも取り組んでいます。地域の資源を最大限に活かしながら、地域の強みを発揮していきたいと考えています。さらに、今後の課題として、今まで社会で培った豊富な経験を活かして、定年後は「このまちで働く」という仕組みができれば、持続可能なまちづくりにつながると思っています。

　このまちの人々は、みんな仲が良く声を掛け合います。おせっかいかもしれませんが、となりのことも家族のことも同じように大切にしています。

　ふるさとを大切に想う気持ちが、つぎの世代へとつながるように、私たちの時代でしっかりと土台を作っていきたいと思います。

（ええまち比也野里　会長　藤井琢己）

お家まで配達